

日琉諸語の下位分類とアクセント研究

中澤 光平
(国立国語研究所)
k.nakazawa@ninjal.ac.jp



付記

- 本発表はヤポネシアゲノム新学術領域B02(言語) 班2019年度研究集会(2020.01.11-13)にて「How valid is the “merger of accentual classes” for the phylogenetic classification of Japanese dialects?」という題で発表した内容を大幅に修正したものです。
- 本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(代表: 木部暢子)、科研費18H05510および科研費19K20801の成果の一部です。

要旨

- 本発表では、アクセント研究と日琉諸語の系統論(特に下位分類)を巡る諸問題について発表者の考えを述べる。特に次の点について話をすすめる。
 1. アクセント(史)研究に関する用語の整理
 2. アクセント研究は下位分類に有用か
 3. アクセント変化の原則と九州および琉球諸語のアクセント祖体系の再建
 4. その他、発表者が気になること

要旨

- 日琉諸語のうち、本土諸方言ではしばしばアクセント体系が方言区画論に代表される諸方言の下位分類に利用されてきた。
- しかし、類の統合に基づく類別体系や共時的なアクセント体系による系統関係は、琉球諸語で近年行われている共有改新による下位分類と大きく異なると考える。

前提: 比較言語学

- 「2つ以上の言語体系を比較し、それらの間の系統関係と歴史的な変化を研究する学問」(『明解方言学辞典』より)

英語	ラテン語	マオリ語
ドイツ語	ヒッタイト語	マレー語
フランス語	アラビア語	ハワイ語
イタリア語	ヘブライ語	中国語

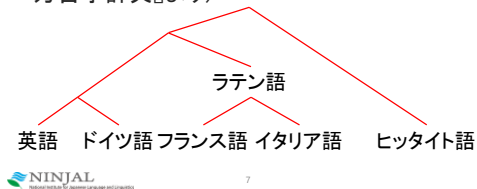
前提: 比較方法

- 偶然の一致、借用、並行変化などを除外し、「対応」をもとに同源語を認定する。

意味 \ 言語	英語	ドイツ語	フランス語
2	two	zwei [tsvai]	deux
10	ten	zehn	dix
歯	tooth	Zahn	dent
示す	teach(教える)	zeigen	dire(言う)
cf. テスト	test	Test	test

前提: 下位分類と系統樹

- 変化(改新)を基準にして、同系統の言語間分岐を整理すること
- 下位分類は系統樹で表すことが多い(『明解方言学辞典』より)



7

前提: 比較方言学

- 比較言語学の方法論を方言に適用するもの。
- 方言の場合同系統なのは自明のため、主眼は祖語の再建(と下位分類)になる。

NINJAL

8

前提: 方言への比較方法の適用

- 借用を除けば、同源語は比較的自明
- 音対応による変化の推定および祖形の再建(と下位区分?)

意味 \ 方言	東京	首里	岩手
菊	kikw	tjiku	kigw
岸	kiji	tjiji	kisui
肝	kimo	tjimu	kimo
息	iki	itji	eg
生き物	ikimono	itjimun	egimono

NINJAL

9

前提: 比較方言学の問題点

- 琉球諸語はまだしも、本土諸方言は「変異」に乏しい。(あるいは激しい接触の結果か?)
- cf. 開合、四つ仮名、前鼻音、合拗音、...

意味 \ 方言	東京	淡路	cf. 与那国
菊	kikw	kiku	fiku
岸	kiji	kiji	kitji
肝	kimo	kimo	tjimu
息	iki	iki	iti
生き物	ikimono	ikimon	(itimutji)

NINJAL

10

前提: 比較方言学の問題点

- 分節音に対し、アクセントは明瞭に異なる。
→本土ではアクセントによる比較方言学が盛んに?

意味 \ 方言	東京	京都	鹿児島
菊	LH-L	HL	LH
岸	LH-L	HH[マ]	LH
肝	LH-L	HL	HL[マ]
息	HL	LH	LH
生き物	LHLL, LHH	HHLL	LLLH

NINJAL

11

1. アクセント論の用語の整理

- 類(アクセント語類)
- 類別語彙
- 類別体系(式)
- 音調型(カタ)
- ～～系

NINJAL

12

1.1 アクセント語類と類別語彙

- アクセント語類(単に「類」とも)
 - ✓ 現代諸方言と文献資料における単語アクセントの対応に基づいて祖体系に立てられるアクセントの対立グループ(上野2006)
- 各類の所属語彙を**類別語彙**と言う。
- 類は**2拍名詞第1類**、...のように、**品詞**の情報が含まれる。そのため、アクセントのみで分類したグループを「**群**」と呼ぶことがある。

1.2 類別体系

- 類の統合の仕方を**類別体系**と呼ぶ(上野1985)

	東京	京都	鹿児島
鼻(ハナ)、鳥(トリ)、 1類	LH, LH-H	HH, HH-H	HL, LH-L
型(カタ)、橋(ハシ)、 2類	LH, LH-L	HL, HL-L	HL, LH-L
花(ハナ)、耳(ミミ)、 3類	LH, LH-L	HL, HL-L	LH, LL-H
肩(カタ)、針(ハリ)、 4類	HL, HL-L	LH, LL-H	LH, LL-H
雨(アメ)、猿(サル)、 5類	HL, HL-L	LF, LF-L	LH, LL-H

2拍名詞以外の類別語彙(一部)

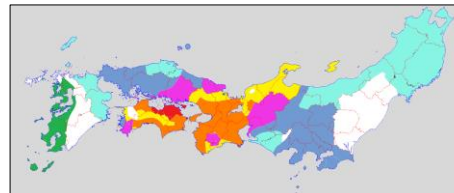
- 1拍名詞**
 - 1類: 血(チ)、帆(ホ)、...
 - 2類: 葉(ハ)、日(ヒ)、...
 - 3類: 火(ヒ)、穂(ホ)、...
 - *4類: 巢(ス)、...
 - *5類: 齒(ハ)、...
 - 2拍動詞**
 - 1類: 飛ぶ、着る、...
 - 2類: 切る、見る、...
 - 3拍名詞**
 - 1類: 鯉、隣、...
 - 2類: 東、娘、...
 - *3類: 力、二十歳、...
 - 3拍動詞**
 - 1類: 送る、曲げる、...
 - 2類: 泳ぐ、投げる、...
- (ア)

1.2 類別体系

- 基本的に**2拍名詞の類の統合**に基づく
 - 中央式: II-1/2/3/4/5
 - 讃岐式: II-1/3/2/4/5
 - 真鍋式: II-1/5/2/3/4
 - 外輪式: II-1/2/3/4/5
 - 西南部九州: II-1/2/3/4/5
- ただし、内輪式と中輪式は1拍名詞も関わる
 - 内輪式: II-1/2/3/4/5, I-1/2/3
 - 中輪式: II-1/2/3/4/5, I-1/2/3

日本語諸方言のアクセント分布

原則として同色が同じ類別体系

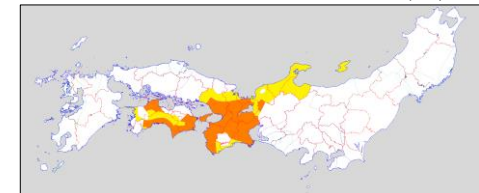


Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

中央式アクセントの分布

II-1/2/3/4/5(ただし垂井式※などを含む)

※垂井式: II-1/4/2/3/5など

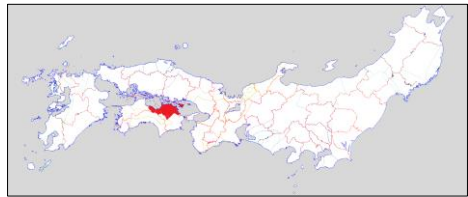


Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

讃岐式アクセントの分布

II-1・3/2/4/5 (近隣に伊吹式※、真鍋式あり)

※伊吹式: II-1/2/3/4/5



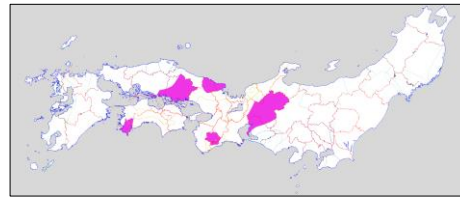
Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

NINJAL
National Institute of Japanese Linguistics

19

内輪式アクセントの分布

II-1/2・3/4・5, I-1/2・3



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

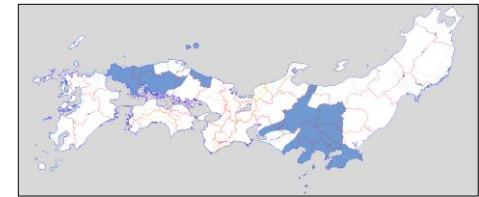
NINJAL
National Institute of Japanese Linguistics

20

中輪式アクセントの分布

II-1/2・3/4・5, I-1/2・3

※隠岐は3拍語は中輪式と異なる



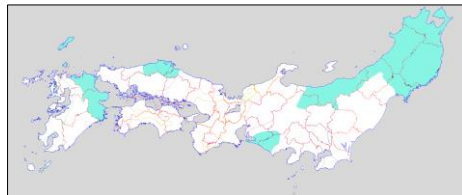
Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

NINJAL
National Institute of Japanese Linguistics

21

外輪式アクセントの分布

II-1・2/3/4・5



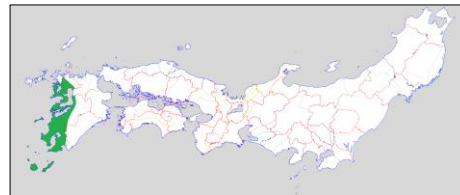
Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

NINJAL
National Institute of Japanese Linguistics

22

西南部九州二型アクセントの分布

II-1・2/3・4・5



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

NINJAL
National Institute of Japanese Linguistics

23

1.3 その他の用語の整理(1)

- 上野(1985)による「〇〇式」、「〇〇型(カタ)」、「〇〇系」の定義
 - ✓ 共時論的に見た類別体系を「〇〇式」とする
 - ✓ 同一の類別体系を前提にしなから、その音調型を問題とすることは「〇〇型(カタ)」とする
 - ✓ 史的観点から同一の「系譜」を有すると認められるものは「〇〇系」とする
 - 系譜: 同一の「系統」内の具体的な内部関係

NINJAL
National Institute of Japanese Linguistics

24

1.3 その他の用語の整理(2)

- ○○式
 - ✓ 平板式、起伏式、高起式、くぼみ式、α式のように音調についても「～式」ということがある
- ○○型(がた)
- ✓ 頭高型、上昇型、①型、A型のように音調についても「～型」ということがある
- ○○型(ケイ)
- ✓ 二型、三型のように、アクセント体系を「～型(ケイ)」というが、部分体系や対立数にも

1.3 その他の用語の整理(3)

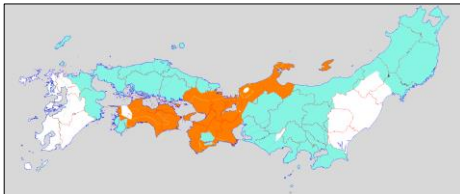
- ○○調
 - ✓ 半下降調、重起伏調のように音調について「～調」ということがある
- 群
 - ✓ 高起群、低起群のように、音調のグループについても「～群」ということがある
- 核
 - ✓ アクセント単位全体のピッチに関わる式に対し、局所的にピッチを変更する要素

服部によるアクセント体系と下位分類

「...四国と近畿、山陽と東方の共通性から、前者を甲種方言、後者を乙種方言として、この間の「アクセントの著しい相違」が非常に古く生じた」とする見解に達し、「民族移動の如き事実も考えられない事はない」この地理的分布を、その外縁に位置する諸体系が甲乙二種のいずれに結び付けられるかという問題とも結び付けて、祖語からのアクセント変化によってどう説明するかの試みがはじまる。」(児玉2017: 4)

甲種と乙種の分布

オレンジが甲種、水色が乙種



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

2. アクセント体系と下位分類

- 次の3名の説を検討する。
 - 徳川宗賢(1962)
 - 上野善道(1985, 1987)
 - 平子達也(2017)
- ただし、3説とも「アクセント体系」の系譜であって、「方言の系譜」ではない点に注意

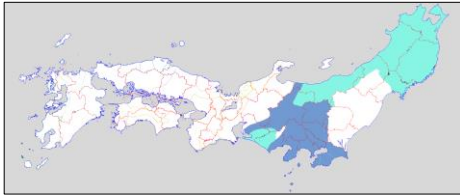
「当然、アクセントだけで方言の系譜・系統を明らかにすることはできない。しかし、現状、アクセント以外に有効な手立てがないということ、少なくとも、アクセント以上に系統分析に必要なデータが整えられているものもない。」(平子2018:74)

徳川(1962)

- 次の原則に基づきアクセントの系譜を再構
 - 2拍名詞(2音節名詞)のみを対象とする
 - 類は統合(合流)するのみで、分裂しない
 - 統合していないII-1/2/3/4/5を第一次アクセントとし、統合するごとに第二次、第三次、...とすると、第二次から第四次へというような飛躍的移行はなかったと考える
 - 地理的分布を考慮する
 - 音調型は考慮しない

東日本アクセント

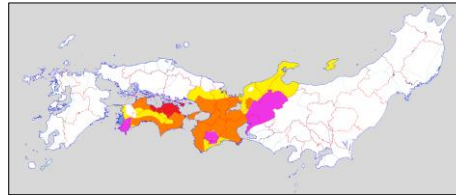
- 中輪式(■)、外輪式(■)が含まれる。
- 祖体系は*I-I-1/2/3/4・5になる。



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

中央日本アクセント

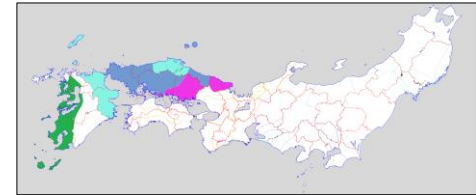
- 中央式(■)、讃岐式(■)などが含まれる。
- 4類と5類の区別は新しい可能性。(cf. 出雲)



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

西日本アクセント

- 中輪式(■)、外輪式(■)などが含まれる。
- 祖体系は*I-I-1/2/3/4・5になる。(cf. 出雲)



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

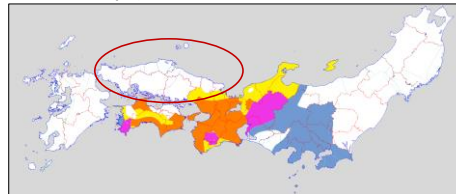
上野(1985, 1987)

- 徳川(1962)を受けつつ、次の点を修正。
 - 1拍名詞も考慮
 - 音調型も考慮
 - 外的要因も考慮

「...さらに言えば、私見では、京都方言と東京方言は、そのアクセント体系の違いにもかかわらず、複合語規則その他の点で驚くほど近い関係にあり、通説になっている感のある日本語アクセントの2大タイプではない。両方言は、かなり後の段階で分かれた可能性がある。」(上野2006: 33)

京都・東京系アクセント

- 中央式、中輪式(、内輪式)などが含まれる。
- 中央式が祖体系。(ただし3拍名詞の対応の問題)



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

平子(2017)

- 3拍名詞も考慮
 - 3拍名詞の6類と7類をともにabの2つに分ける
 - 類の統合が中心だが地理的分布も考慮
- (主に)3拍名詞の対応に基づいて外輪式を内外輪式と外外輪式に二分する。

「...内輪式アクセントと中央式アクセントが一系統を成すのに対し、中輪式アクセントは内外輪式アクセントと一つの系統群を成すとする。一方で、外外輪式アクセントは、これら二系統とはまた別の系統にあるものということになる。」(平子2017: 274)

内外輪式と外外輪式

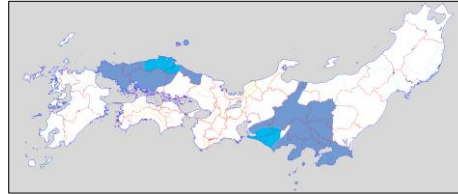
- 東海と山陰は**内外輪式**、東北と九州は**外外輪式**。
- 外外輪式では「頭高化」があった。



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

内外輪式と中輪式

- 内外輪式(■)は中輪式(■)に近い。
- 中央式・内輪式とも同系統(?)



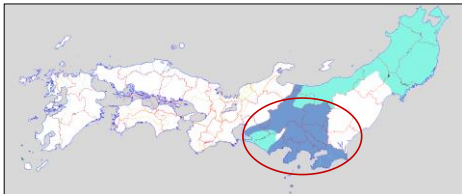
Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

3説の比較

- 東京を含む地域をどこの系に含めるかが3説とも異なる。
- 平子(2017)は3拍名詞の対応も考慮している点で精密だが、III-6aと7bの統合を共有している内輪式を内外輪・中央式の系統に含めないなど疑問点も。(地理的分布を重視?)
- 上野(2006)も、「III-7bは、内輪式方言と中輪式方言ではIII-6に合流している。他では、III-7aに合流した。」(p.39)と述べ、東京では中央式と異なる類の統合を示唆。

東京の系統(徳川説)

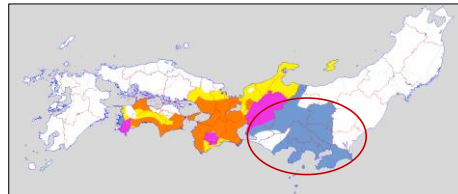
- 東京は東日本系に含まれる。



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

東京の系統(上野説)

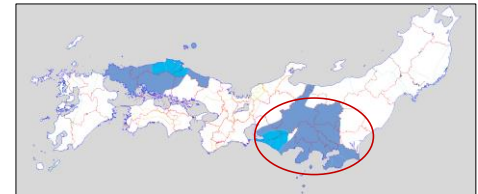
- 東京は中央語系に含まれる。



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

東京の系統(平子説)

- 東京は東部準周辺部系に含まれる。



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

五十嵐(2018b)の指摘

- 言語/方言同士の類似性と系統的な近縁性は互いに独立した尺度である。表面的には類似した2言語の系統的距離が、表面的には大きく異なる2言語間の系統的距離より、大きいこともあり得る。
- 言語の近縁性を主張するためには、仮定される両者の共通祖語以前には存在せず、共通祖語において新たに生じた特徴を見つけ出さなければならない。

五十嵐(2018b)の指摘

- 系統的な近縁性は共有改新によってのみ主張できる。
 - 改新: より古い時代には存在せず、特定の時代に新たに生じた言語的特徴
- 改新を共有する諸言語は、(改新の共有が借用あるいは並行変化の結果でない限り、)それのみからなる系統群をなす。
- 古形を共有している事実は、下位分類の根拠となりえない。

並行変化の問題

- 系統関係とは独立に、同じ変化(改新)が生じること。
- 音韻変化は規則的なため、言語系統とは無関係に生じうる。
- アクセントのように分節音より要素が少ない場合、並行変化が特に生じやすいことが予想される。

「さらに言えば、アクセントを系統分析に使うことにはリスクもある。まず、アクセントには、平行進化・平行発達の問題が分節音以上に付きまとう。」(平子2018:74)

並行変化の問題

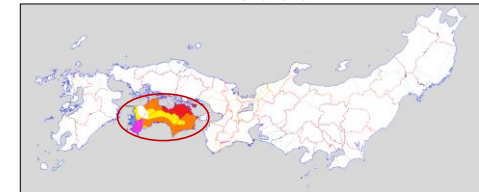
- アクセントの系統についての先行研究は、いずれも類の統合に着目するが、類の統合はアクセントの合流変化という規則的な音韻変化のため、系統的な基準には不向き。
- 関東と中国地方で中輪式という共通した類の統合が生じているが、同系統と主張していないことから示唆される。(cf. 乙種)
- アクセント変化には、類の統合(式)、音調型、体系の変化が考えられるが、いずれも音韻変化(規則変化)であり、並行変化の問題がある

四国諸方言のアクセント

- 四国には多様な類別体系が分布
 - 中央式 (II-1・2・3/4/5)
 - 内輪式 (II-1・2・3/4・5) ※愛媛県には中輪式も
 - 讃岐式 (II-1・3/2/4/5)
 - 真鍋式 (II-1・5/2/3/4)
 - 外輪式 (II-1・2/3/4・5) ※愛媛県魚島
 - 伊吹式 (II-1/2/3/4/5)
- 類の統合を共有せず、アクセント上は単系統とは言えない。

四国諸方言のアクセント

- 香川県伊吹島はII-1/2/3/4/5で5つとも対立。
- 四国の「祖体系」はII-1/2/3/4/5



Wikipedia「日本語のアクセント分布」をもとに作成

四国方言の単系統性

- 次の形式は概ね四国にのみ分布し、四国方言が単系統をなすことを示唆。
 - ～ク「～のところ」、キリブサ「踵」、ミゾイ「短い」、モンタ・モンテ「戻る・戻って」、アツカム「叱る」、ズク「面倒がる」、...
- さらに、次の形式は淡路と四国にのみ分布し、淡路・四国が単系統をなすことを示唆。
 - アンダイ「心配」、オゴク「要求する」、シマル「しやがる」、シャガ「間違い」、タブネ「転寝」、マギル「邪魔になる」、～ジャー「～も」、...

琉球諸語の下位分類

- 共有改新に基づく下位分類がローレンス (2006) や Pellard (2009) で試みられている。
- 改新のすべてが同程度の重みをもつわけではない (ローレンス 2006: 102)
 - p > h は琉球方言のうち与那国 (八重山)、池間 (宮古)、奄美・沖縄の多くの方言で生じている
- 各方言で独自に起こった変化 (並行変化) を排除するため、比較的珍しい規則的な変化か、不規則的な変化を対象にする

琉球諸語の下位分類

- 用いられている改新の例
 - *pato > *paoto/pooto 「鳩」
 - *gacucu > *gasusu 「(食べられる種の) 海胆」
 - *kame > *kaame > *kaamee 「亀」
 - *kasugUri > kasagUri 「痰」
 (以上、ローレンス 2006 より)
 - *uwe- > *ibe- 「植える」
 - *gani > *gai 「蟹」 (※ *gani > *gari か)
- (以上、Pellard 2009 より)

アクセントは系統論に使えるい？

- 「類の統合」のような規則変化は **不可能**
 - 琉球諸語の下位分類にも利用されていない
 - 一方で、変則的なアクセント変化は **利用可能**
 - 天草諸方言での「窓」の *B > A (五十嵐・松浦 2015)
 - 沖縄諸方言での「今」の *C > A (ローレンス 2006)
 - 南琉球諸方言での「幾つ」の *C > A (ローレンス 2008)
- これらは類の統合のような規則的な変化ではなく、語彙的な変化で、かつ諸方言に共有されている (共有改新)

アクセントと系統論：議論の前に

- 同系統かの認定は規則的な音対応に基づく
 - アクセントを含め、同源語での規則的な対応関係によって同系統であることが保証されている前提
- ただし、下位分類は全ての言語 (方言) に共有されている要素では不可能
 - 規則変化は不可。並行変化が見られるか、方言群が定義不能 (e.g. -t- > -d-, pi > ti, ai > e)
- 変化の順序に気を付ける
 - 共有改新のように見えても、共通祖語が再建できなければ、借用か並行変化

アクセント研究と系統論 (1)

- 伊吹島は2拍名詞の5つの類を区別する第一次アクセントのため、他方言との近縁性が不明。
 - 厳密には3拍名詞で4類と5類の一部の統合が見られる。
 - 2拍名詞でも、去声始まりの語では合流が生じている。
- しかし、3拍名詞1類の「形」が H1[HLL] となる点で讃岐式と共通する。そのため、伊吹島方言は讃岐式諸方言に最も近縁と考えられる。
- 同様に、「海、黍、足袋、艶」や「鯛、堺」などのアクセントから、四国方言、とりわけ讃岐・真鍋式に近いことが示唆される。

アクセント研究と系統論(2)

- ・アクセント体系の例
- ・淡路方言のアクセント(中央式II-1/2・3/4/5)

✓ 2拍名詞

第1類	第2類	第3類	第4類	第5類
H0 [HH]	H1 [HL]	H1 [HL]	L0 [LH]	L2 [LF]

✓ 3拍名詞

第1類	第2類	第4類	第5類	第6類	第7類
H0 [HHH]	H2など	H2 [HHL]	H1 [HLL]	L0 [LLH]	L2 [LHL]

アクセント研究と系統論(2)

- ・III-5は瀬戸内の諸方言で「分裂」(松森1997)
 - <a群>油、五つ、命、心、柘榴、涙、箒、枕、...
 - <b群>朝日、鮑、哀れ、姿、簾、錦、山葵、...
- ・上の「分裂」を松森(1997)は改新、上野(2006)は保持と解釈。
- ・改新であれば系統論に利用できるが、保持では不可能。
- ・中央式では上記の2群の区別はなくH1が対応。
- ・5類の一部(5xとする)はL2など違う型で出る。

中央式におけるIII-5aのアクセント

	京都	祇王	中川	淡路	明石	小野	すさみ	徳島	高知
油	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
命	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
柘榴	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
涙	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
箒	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1

中央式におけるIII-5bのアクセント

	京都	祇王	中川	淡路	明石	小野	すさみ	徳島	高知
朝日	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
鮑	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
簾	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
姿	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
錦	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1

中央式におけるIII-5xのアクセント

	京都	祇王	中川	淡路	明石	小野	すさみ	徳島	高知
襦	H1	H1	H1	L2	L2	L2,H1	H1	L2	H1
茄子	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2	L2	L0
柱	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2	L2	L2
狸	H1	L2	H1	L2	L2	L2,H1	L2	L2	H1
睫毛	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2	L2	L2

非中央式におけるIII-5aのアクセント

	(淡路)	広島	志々島	高松	飯野	三本松	伊吹島
油	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0 [HHM]
命	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
柘榴	H1	H0	H2	H0	H0	H0	H0
涙	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
箒	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0

非中央式におけるIII-5bのアクセント

	(淡路)	広島	志々島	高松	飯野	三本松	伊吹島
朝日	H1	H1	H1	H1' [LFL]	H1	H1	H1
鮑	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
鯨	H1	H1	H2	L2	H1	H1	H1
姿	H1	H1	H2	H1	H1	H1	F0
錦	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1

非中央式におけるIII-5xのアクセント

	(淡路)	広島	志々島	高松	飯野	三本松	伊吹島
樺	L2	L2	L2	L2	L2	L2	L2
茄子	L2	L2	L0	H1'	L2	L0	L0
柱	L2	L2	L2	L2'	L2	L2	L2
狸	L2	L2	H2	H1'	H0	L2	L2
睫毛	L2			L2'	L2	H1	L2

3拍5類の対応(まとめ)

- 3拍5類は概ね次のように対応する。

	中央式 中央	中央式 周辺	真鍋式	讃岐式	伊吹式
a	H1	H1	H0/H2	H0	F0
b	H1	H1	H1	H1	H1
x	H1	L2	L2	L2	L2

3拍5類の対応(まとめ)

- aとbには音韻条件がないが、bとxにはある。
 - bは第2母音が概ね広い。
 - xは第2母音が概ね狭く、第1母音が広い。
- aとb(x)は本来の対立の保持(古形)、bとxは新しく生じた変化(改新)
- bとxの区別が見られる近畿・四国(中央式の淡路・明石・すさみ・徳島・高知)と四国諸方言(真鍋式・讃岐式・伊吹式)は系統的に近い可能性。

アクセント研究と系統論(3)

- 方言のように系統的に近い言語では伝承語と借用語の区別が困難。
- しかし、アクセントから借用語がわかる場合も。
 - ニワトリ「鶏」: 鹿児島では予想されるAではなくB
 - ウム「産む」: 東北などでは予想される0ではなく1
 - オンナ「女」: 出雲などでは予想される0ではなく3

「標準語から当該方言に借用された際に、「オンナ」という語形のみならず、アクセントもそのまま取り入れた」(平子2017: 265)

アクセントと借用語

和歌山県田辺方言の例:

- 一部の話者で次のような例を確認。
 - オチルL0～オツルH1「落ちる」、オリルL0～オルルH1「降りる」、ニゲルL0～ニグルH1「逃げる」
- 否定形は オチンL0、オリンL0、ニゲンL0 のため、類推変化の可能性もあるが、次の例は借用を示唆。
 - クズレルH0～クズルルH2「崩れる」、タスケルH0～タスクルH2「助ける」、ナガレルH0～ナガルルH2「流れる」
- 京阪から(一段化した)形式をアクセントごと借用したか。(cf. 京都オチルL0、クズレルH0)

- **NINJAL**
National Institute for Japanese Language and Linguistics

NINJAL
NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS



Government	Percentage
Current government	65%
Previous government	35%

Government	Percentage
Current government	65%
Previous government	35%

NINJAL
National Institute for Japanese Language and Linguistics



NINJAL
National Institute for Japanese Language and Linguistics



NINJAL
National Institute for Japanese Language and Linguistics

12

西南部九州アクセント祖体系私案

- II-4 **LH = LH > LL > HL > LH(')
- II-5 **LF > LH > LL > HL > LH(')
- III-1 **HHM = HHM = HHM = HHM > HHL
- III-2 **HHL > HHM = HHM = HHM > HHL
- III-3 **HLL > HHM = HHM = HHM > HHL
- III-4 **LLL = LLL > HHL > **HHH'** > LHH(')
- III-5 **LLH = LLH > LLL > **HHL** > LHH(')
- III-6 **LHH > LLH > LLL > **HHL** > LHH(')
- III-7 **LHL > LLH > LLL > **HHL** > LHH(')



73

西南部九州アクセント祖体系私案

- 高起群は全て下降式無核となる。
- 低起群のうち、低平型はいち早く語頭隆起を起こし、すぐに語末核型に転じた。
- その他の型も遅れて語頭隆起を生じた。
- 一部の方言では、*HHMの下降強化と低起群由来の*HHLの混乱で高起群に紛れた。
- 上野や木部のように名義抄の式を直接反映する変化ではなく、金田一のように(低起群に)語頭隆起を認めるが、この方が去声の不規則な対応などの説明が容易と考える。



74

西南部九州アクセント祖体系私案

- 高起群も一気に***HHL**...ではなく一旦***HHM**...を経ると考える(cf.上野2020)
- 語頭隆起を想定する場合、***HHL** > **HHH**(')と***HHM**との対立の保持が問題となるかもしれないが、伊吹島では***HHM**と合流せずに**HHL** > **HHF**の変化が生じており、実現可能な変化である。
- 低起群は語頭隆起により全て***HH**...を経るので、***MH**...~***LM**...は単に語頭の低下で良い。
- **R-も語頭隆起を起こしたと見るが、他の低起群より遅れたため、対応に乱れが生じたか。



75

琉球アクセント祖体系

- 琉球には下げ核が弁別的な方言(名瀬など)、昇り核が弁別的な方言(与論など)、上げ核が弁別的な方言(沖永良部など)が分布。南琉球にも、(核かはさておき)下がり目が弁別的な方言がある(多良間・与那国など)。
- 東北方言のような言い切りと接続の交替がなくとも、上昇と下降の遅れのみでは、上げ核や昇り核から同じ位置での下げ核への変化は困難。
- 従って、琉球祖語は下げ核が弁別的だったと考える。



76

琉球アクセント祖体系

- 現代琉球諸語は基本的にA, B, Cの3つの型が区別されるため、祖語も三型アクセントだったと仮定。
- 北琉球の名瀬、沖永良部、与論方言の核の位置から、次の体系を想定。
 - A類: /O, OO, OOO, .../(無核)
 - B類: /Ó, OÓ, OÓÓ, .../(語末核)
 - C類: /-, ÓO, OÓO, .../(次末核)



77

琉球アクセント祖体系

- 名瀬、多良間、与那国などでは**文節(語頭)が高く始まる**(あるいは高い型がある)。
- 九州で主張したように、発表者は上昇の早まりを認めないため、独立して高く変化したのでなければ、琉球祖語で語頭が高かったことになる。
- 従って、次のような音調型を再建する。
 - A: F, HM, HHM, HHMM, ... (※Fは半下降)
 - B: H', HH', HHH', ...
 - C: -, HL, HHL, HHHL, ...



78

琉球アクセント祖体系

- 琉球アクセント祖体系からの変化例:

– 多良間方言

A: *HHM-MMM > HHH-HHH > HHH-HHH

B: *HHH-LLL > HHH-HLL > HHH-HHL

C: *HHL-LLL = HHL-LLL = HHL-LLL

– 与那国方言

A: *HHM-MMM > HHH-HHH = HHH-HHH > LHH-HHH

B: *HHH-LLL > HHH-HLL > LLL-HHH > LLL-LLL

C: *HHL-LLL > HHH-HLL > HHH-HHL > LHH-HHH'

琉球アクセント祖体系

- 琉球祖語のA,B,C類と本土の類には概ね次の対応がある。

– I-1,2, II-1,2, III-1,2,(3) :: A

– I-3,(4),(5), II-3,4,5, III-4,5 :: B

– II-(3),4,5, III-(4),5,6,7 :: C

- 高起群はA類に対応。
- 低起群はB類とC類に分裂。
- 去声始まりは概ねC類に対応。(児玉2017: 25)

琉球アクセント祖体系

- 琉球祖語のB,C類は高く始まると推定したため、日本祖語で低くなったか、琉球祖語で語頭隆起したかのいずれか。
- 日本祖語は上昇と下降が弁別的だが、琉球祖語(私案)は下降のみが弁別的なことから、琉球祖語側で改新が生じたと考える。
- 西南部九州と同様の変化を想定。

– **HM, HL > HM = HM = HM

– **LL = LL > HL > HH(')

– **LH, LF > LH > LL > HL

日琉アクセント祖体系

- 本土の類とA,B,Cには対応にずれがある。
- このずれを琉球祖語での不規則な改新と見る場合、本土祖体系には修正は不要。
- しかし、異なる体系同士の接触など、ずれの要因が説明できないのであれば、共通祖語に区別があったものとするしかない。
- その場合、2拍名詞には1,2,3B,3C,4B,4C,5B,5Cの8つの類を立てる必要がある。

日琉アクセント祖体系

- 琉球祖語のB類は語末核、C類は次末核のため、次のように祖形を再建する(一部のみ)。

– II-1 HM /!OO/ III-1 HHM /!OOO/

– II-2 HL /!O]O/ III-2 HHL /!OO]O/

– II-3B LL /_OO/ III-4B LLL /_OOO/

– II-4B LH /_O]O/ LLH /_OO]O/

– II-4C RH /_OO/ III-4C LHH /_O]OO/

– II-5B LF /_O]O/ III-5B LLF /_OO]O/

– II-5C RL /_O]O/ III-5C LHL /_O]O]O/

日琉祖体系 > 日本祖体系(2拍)

- | | [1] | [2] |
|---------|------|---------------|
| • II-1 | **HM | = HM |
| • II-2 | **HL | = HL |
| • II-3B | **LL | = LL |
| • II-4B | **LH | = LH |
| • II-4C | **RH | > LH |
| • II-5B | **LF | = LF |
| • II-5C | **RL | > LF (**RFも?) |

日琉祖体系>琉球祖体系(2拍)

- | | [1] | [2] | [3] | [4] | [5] |
|---------|------|------|------|------|---------|
| • II-1 | **HM | = HM | = HM | = HM | = HM |
| • II-2 | **HL | > HM | = HM | = HM | = HM |
| • II-3B | **LL | = LL | = LL | > HL | > HH(') |
| • II-4B | **LH | = LH | > LL | > HL | > HH(') |
| • II-5B | **LF | > LH | > LL | > HL | > HH(') |
| • II-4C | **RH | = RH | > LH | > LL | > HL |
| • II-5C | **RL | > RH | > LH | > LL | > HL |

日琉祖体系>日本祖体系(3拍)

- III-1 **HHM = HHM = HHM
- III-2 **HHL = HHL = HHL
- III-3 **HLL = HLL = HLL
- III-4B **LLL = LLL = LLL (**LLHもIII-4Bに合流)
- III-4C **LHH = LLH > LLL
- III-5B **LLF = LLF > LLH (本土の5aに対応?)
- III-5C **LHL = LHL > LLF (本土の5bに対応?)
- III-6 **RHH = RHH > LHH
- III-7 **RLL = RLL > LHL (**RHL, **RHFも?)

日琉祖体系>琉球祖体系(3拍)

- III-1 **HHM = HHM = HHM = HHM > HHM
- III-2 **HHL > HHM = HHM = HHM > HHM
- III-3 **HLL > HHM = HHM = HHM > HHM
- III-4B **LLL = LLL > HHL > HHH' > HHH'
- III-5B **LLF > LLL > HHL > HHH' > HHH'
- III-4C **LHH = LHH > LLH > LLL > HHL
- III-5C **LHL > LHH > LLH > LLL > HHL
- III-6 **RHH > LHH > LLH > LLL > HHL
- III-7 **RLL > LHH > LLH > LLL > HHL

日琉アクセント祖体系のII-3Cの再建

- 「甕、蚤、浜、骨」などがII-3Cの対応を示す。
– 他に「瘤、尻(シリ)、担桶(知)、樽、縁(ヘリ)、毬(マリ)」などもその候補か。
- 「毬」にはマーリのような長母音の方言形が見られるため、3拍語相当の**ma[:ri]を再建。
- **ma[:ri] > ma[:ri] > ma:riと、III-4Cと同じ変化が生じた後に短母音化(ma:ri > mari)した。
- 同様に、**no[:mi]、**pa[:ma]、**ta[:go]などを再建する。

日琉アクセント祖体系のII-3Cの再建

- 「蚤」はno+mi(cf.シラミ)、「浜」はpa+ma(cf.島、沼、山)、「骨」はpo+ne(cf.胸)、「甕」はka+me(cf.瓮(か))のように2語的だった可能性もある。
- いずれにせよ、「後」(アト)、「中」などのII-4Cと区別するため、II-3Cは長母音を立てる。
- III-4Cは**LHH > LLH > LLLとなるのに、II-4Bが**LH > LLとならないのは、II-4Cの**RHと合流し**R-を継承するため。

日琉アクセント祖体系のII-3Cの再建

- II-3Cの変化については、III-4C(刀類)の認定とも関わる(五十嵐2018a)が、一応1つの類をなすと考える。
- 問題は多いが(大門2020)、III-5のB,Cは日本語の5類のa,bに対応するものと見られる。
- 琉球諸語含め、II-3Cが長母音だった痕跡は少ないが、琉球諸語の場合、II-4Cの「海」、「筋」、「舟」、「露」などに見られるように、第2音節の有声子音に長母音が吸収されたと考えられる(児玉2017:26)。

去声始まりの語について

- ・「巢」、「齒」は/_[su]/、/_[pa]/で問題ない。
- ・2拍以上では、**RH, **RLなどのうち、1拍目が独立的なものは*R-が保持されて去声始まりになった(cf.上野2006:36)。
- ・漢語などの借用語は日琉祖体系には遡らない。
- ・一方、「百合」や「先ず」はそのような処理が困難。これらは/_[ju:ri]/、/_[ma:]du/と考える。
- ・「稊」は/_ma[:ri]/のため、長母音内で昇り核の対立があったと解釈する。

アクセント再建を巡って:核の解釈

- ・西南部九州、琉球ともに、高起群が無核化することから、低起群を含めいったん下げ核を完全に失い、昇り核のみが弁別的だった段階を想定する。東北の外輪式(外外輪式)も同様に考える。
- ・しかし、上野(2020)は北奥祖体系への途上のいずれの段階でも下がり目がある型を立てていて、北奥祖体系になるまでは常に下げ核が弁別的だったと考えているようだ。
- ・音調型だけでなく、下げ核は他の核などから生じないという制約を考える必要があるか？

アクセント再建を巡って:核の解釈

- ・平子(2017)も、高起群が無核化しても、低起群で下げ核が消失したとは言えないと述べる。
- ・上記の推測が正しければ、低起群の変化には修正が必要だが、下げ核が再度生じることに大きな問題がなければ、高起群・低起群ともに同じ原理で説明したい。
- ・ただし、出雲を含む内外輪式では、低起群に下げ核の消失を想定しない方が良いかもしれない。

アクセント再建を巡って:頭高化

- ・外外輪式の低起群の統合には「頭高化」が関わるとする
 - (II-4,5と)III-6,7の統合は「頭高化」による
 - (II-4,5と)III-6,7の統合のない内外輪式には安定した頭高型(1型)がない
- ・東京のIII-7aは頭高型(1型)で出るが、III-6とIII-7bは平板型(0型)。
- ・しかし、III-6とIII-7bには本当に「頭高化」がなかったのか？

アクセント再建を巡って:頭高化

- III-6 (*LHH): 兎、鰻、鵪、狐、雀、鼠、左、蚯蚓、...
- III-7a (*LHL): 蚕、兜、便り、千鳥、緑、病い、...
- III-7b (*LHF): 苺、鯨、薬、盃、鉛、畑、...
- ・7bは*LHF > LHHで6類と統合した。その後、どのような経緯で0型になったか。
 - 1類(*HHM > HHH)が上昇の遅れを起こし、6類LHHと合流した。あるいは逆に、6類が上昇の早まりを起こして1類と合流した。
 - LHH > LLH > HLLと頭高化した後に平板化した。
→平板化の動機は？

アクセント再建を巡って:頭高化

- ・三重県尾鷲方言のように、6類が1類と合流した方言もあり(平田2020より)、東京などでも同様の変化が生じた可能性はある。
- ・一方で、頭高型を経た可能性も考えられる。
 - その場合、III-6はIII-7aより早くHLLになり、頭高型が「嫌われた」結果、平板化したと考える。
 - 同時期に、頭高型の複合動詞(など)も平板化し、いわゆる山田の法則が成立した。
 - その後、遅れてIII-7aがHLLになり、後に中高型が嫌われ、III-5もLHL > HLLとなった。

アクセント再建を巡って: 頭高化

- アクセント変化の中には、特定の型が「嫌われる」という現象があるようだ。
 - 京都でのHHLの「回避」(例: オトコHHL > HLL)
 - 東京の「A型B型のゆれ」(例: 足元、暑がり、集まり、誤り、金槌、剃刀、雷、食べ物、...)
 - このような場合、下降の早まりなど、通常と異なる変化が起き得る。
- 東京ではIII-5にLHL > HLLが生じた(cf. イトコ)
- かつての頭高型の回避により山田の法則が生じたか? (例: 「受け取る」HLLL > LHHH) cf. なくなる

アクセント再建を巡って: 頭高化

- 頭高型の無核化は中間段階がないなど通常の音変化ではないが、かなり規則的だった可能性。
- (i.) III-1/6の合流と(ii.) III-6頭高化では、III-6とIII-7aの変化の時期を逆に推定する必要がある。
 - III-7aは他と合流しないため、III-7aが先にHLLに転じ、後にIII-1の語頭低下が生じ、III-6はIII-1と合流。(LHL > LLH > HLL, HHH > LHH)
 - III-6はIII-7aより先にHLLに転じ無核化、同変化が完了後III-7aがHLLに変化。(LHH > LLH > HLL, LHL > LLH > HLL)

アクセント再建を巡って: 頭高化

- 無核と有核でどちらの変化がはやすいかは一概に言えない(中澤2015)。
- しかし、出雲のIII-6にも散発的に有核型があったり、3型のように音変化では説明が難しそうな型があることを見ると、東京を含め頭高型からの変則的な変化があったのではないか。
- 上の前提に立つ場合、東京の古い頭高型の語(山寺、赤とんぼ、鬼ヶ島、松平など)は、その時期は頭高型でなかったか、何らかの理由で頭高型が保持されたものか。

4. その他について

- 琉球諸語が日本語諸方言と共有していると思われるアクセントの改新がある。
 - 「綱」はII-3B対応だが、動詞「繋ぐ」は低起式から高起式に転じている
 - 「叩く」は低起式だが「戦う」は高起式化している
 - 「熱い」は低起式だが「扱う」(「熱かふ」に由来するとされる)は高起式化している
- 他に「疲れる」の高起式化などがある。
- これらのうちいくつかは、祖語より時代が下って日本語で生じたことが明らかな改新である。

4. その他について

- これらの改新を琉球が共有していることは何を意味するか。全てを借用で片付けてよいのか。
- 琉球でA型になるのは借用によるか。本土方言の高起式形を反映しているか。
- 本土方言ではなぜ高起式化したのか(動詞の多数派からは外れそうな変化)。「暑い」などはむしろ形容詞の方が改新形か?(cf. 広い、広がる)
- 本土諸方言ではこの変化はどの程度共有されているのか。(東京・京都・鹿児島・琉球以外にも西日本各地では生じているよう)

アクセント用語について: 簡単に

- 「～式」(類別体系)
 - ✓ 共時論的に見た類別体系の意味に限定
 - ✓ 音調型の下位分類は「～型(カタ)」としたい
 - ✓ 2拍名詞のみに基づくと中輪式と内輪式が区別できず(隠岐も)。1拍～3拍を考慮した名称が望ましい。cf. 内外輪式・外外輪式
 - ✓ 「～式」はアクセント体系を含意した用法も見られるが、それは避けたい。
 - ✓ 京阪の若年層は別の式になる?

アクセント用語について:簡単に

- ・「～系」
 - ✓ アクセント体系の系譜というよりは、方言系統の意味で用いたい。
 - ✓ 本発表はアクセントは系統論に使えないという立場のため、系統は別に議論が必要
 - ✓ その上で「東日本系」「四国系」「九州系」などの名称を用いたい。
 - ✓ その方がアクセントの再建が循環論にならない(気がする)

アクセント用語について:簡単に

- ・「～型(がた)」「音調型」
 - ✓ アクセント単位全体の音調パターンを指す
 - ✓ 式と核がある方言では両方の特徴をまとめたもの。式の場合のみは式＝型となるが、核の場合は位置(と有無)によって型が異なる。
- ・「～式」
 - ✓ 音調に関する式は語彙的な特徴に限り、そうでないものは「～調」の名で呼ぶ。

まとめ

- ・アクセント研究と方言の系統論について、発表者の立場から論じた。
- ・類の統合では方言の系統だけでなく、アクセント体系自体の系統も論じたい(何が同系か特定できない)
- ・アクセントでも不規則変化であれば利用可能。また、借用語を見分ける武器にも
- ・アクセント変化の中には、規則的ながらも音変化と言えない変化があるかもしれない

引用文献

- ・上野善道(1985)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40-3: 215-250.
- ・——(1987)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42: 15-70.
- ・——(2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- ・——(2009)「On the Reconstruction of Japanese Accents」International Workshop on "the History & Reconstruction of Japanese Accent"発表資料
- ・——(2010)「与那国方言のアクセントと世代間変化」『日本語研究の12章』: 504-516.
- ・——(2011)「N型アクセントとは何か」公開シンポジウム「N型アクセントの原理と成立」発表資料
- ・——(2012)「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.
- ・——(2020)「北奥方言の昇り核の由来」『国語研究』83: 1-26
- ・五十嵐陽介・平子達也(2014)「佐賀県北方町周辺方言における3拍5類の対応がアクセントの歴史的研究に与える示唆」日本言語学第149回大会.
- ・——・松浦年男(2015)「天草諸方言のアクセント資料の提示と新しいアプローチに基づいた西南部九州諸方言の系統分析の試み」『九州大学言語学論集』35: 71-102.
- ・——(2018a)3拍名詞第4類における本土日本語と琉球語間の1拍2のアクセント型の対応について「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」発表資料
- ・——(2018b)分岐学的手法に基づいた日本語・琉球諸語方言の系統分類の試みシンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」発表資料

引用文献

- ・児玉望(2017)「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ 熊本大学言語学論集』16: 1-34
- ・大門知樹(2020)「方言アクセントから再建される日琉祖語の3拍名詞類別語彙」日本語学会2020年度春季大会
- ・徳川宗賢(1962)「『日本諸方言アクセントの系譜』試論—「類の統合」と「地理的分布」から見る」『学習院大学国語国文学会誌』6: 1-19.
- ・中澤光平(2015)「南あわじ市沼島方言のアクセントの2単位形」『東京大学言語学論集』36: 239-254.
- ・松森晶子(1997)「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』189: 15-29.
- ・平子達也(2017)「外輪式アクセントの歴史的位置づけについて」『アジア・アフリカ言語文化研究』94: 259-276.
- ・——(2018)「比較方法と日本語方言の系統分析—アクセント史研究の観点から—」『歴史言語学』7: 61-76.
- ・平田秀(2020)「三重県尾鷲方言のアクセント研究」
- ・Pellard, Thomas (2009) Ogami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. Paris: École des hautes études en sciences sociales.
- ・ローレンス・ウエイン(2006)「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』40(2): 101-118.
- ・——(2008)「与那国方言の系統的的位置」『琉球の方言』32: 59-67.

参照文献

- ・上野善道(1985a)「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40-2: 75-179.
- ・——(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集』88』35-73.
- ・——編(1989)「音韻総覧」徳川宗賢監修『日本方言大辞典』42: 15-70.
- ・金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的探究—原理と方法』
- ・都竹通年雄(1949)「日本語の方言区分けと新潟県方言」『季刊国語 第3巻』群馬国語文化研究所.
- ・東條操(1954)「序説」東條操編『日本方言学』1-86.
- ・中井幸比古(1984)「真鍋式アクセントの所属語彙」『言語学研究』3: 81-116.
- ・——編著(2002a)『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- ・——(2002b)「岡山県寒河方言のアクセント」『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究』3
- ・浜野博(2008)「日生の方言—岡山弁の異端—」手帖舎 岡山市.
- ・平山輝男編(1960)『全国アクセント辞典』(1991年発行の27版を利用)
- ・山田美紗(1892-1893)『日本大辞書』